

# 平成 28 年度の鳥取県立博物館

## 1 総 論

開館後 40 年以上経過し、施設設備の老朽化や収蔵庫の狭隘化、駐車場不足など当館が抱える課題への早急な対応が求められる中、自然、歴史・民俗、美術の 3 分野のうち美術分野を博物館の外に出し、新たな施設を整備する方向で検討を進める方針決定（平成 27 年 4 月）に基づき、平成 28 年度は昨年度に引き続き、美術館整備に向けた具体的な検討を進めるため、「鳥取県美術館整備基本構想検討委員会」による基本構想の検討のほか、「鳥取県立博物館協議会」において、博物館の改修計画の検討を行った。

鳥取県美術館整備基本構想検討委員会は、平成 27 年度に 5 回、平成 28 年度に 8 回、合計 13 回開催され、美術館を整備する場合の基本的な設置目的・理念、性格や機能、施設設備や規模、立地条件、運営体制等について順を追って議論し、平成 29 年 2 月に委員会として基本構想を取りまとめた。

なお、建設地については、「鳥取県立美術館候補地評価等専門委員」による委員会を 5 回開催し、候補地を 4 箇所絞り込んだ後に、県民意識調査を実施した。

平成 29 年 3 月に、鳥取県立美術館の整備基本構想の執行機関としての最終取りまとめを行った上で、県議会等にその内容を報告した。これを受け、平成 29 年 2 月定例県議会で、倉吉市営ラグビー場を建設場所とする基本計画及び P F I 導入可能性調査等に県立美術館整備推進に要する予算案が附帯意見を付された上で可決された。

博物館の改修計画については、鳥取県立博物館協議会を 4 回開催し、美術分野が出て行った後の博物館のあり方等、鳥取県立博物館改修基本構想についての検討を行った。

以上のように、本年度は、美術館を整備する場合の基本構想づくりを精力的に行うとともに、その途中途中で、出前説明会や全市町村で開催した美術館キャラバン、更には県内 3 箇所で開催した県民フォーラム等で検討委員会の検討の内容や状況を県民に説明して意見を伺いながら丁寧に作業を進めた。

通常の博物館の活動としては、博物館資料の収集・保存、展示、館内外での普及活動などを、例年どおり着実に実施した。平成 20 年度以降毎年 5 本ずつ開催している企画展については、今年度も自然関係 1 本、歴史・民俗関係 1 本、美術関係 3 本を実施し、夏季に開催した「宇宙への挑戦展」は 1 万人を超える来場者で賑わった。

普及活動では、平成 25 年度から世界的に著名な日本の科学者や、先進的な研究を行っている研究者による講演会（サイエンスレクチャー）を開催しており、平成 28 年度は、宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所の研究者が宇宙について分かりやすく説明する、「宇宙学校・とっとり」を当館で開催した。この他、北海道大学総合博物館准教授小林快次博士の講演「恐竜研究最前線－発掘からわかる地球と私たちの未来－」を米子市文化ホールで開催した。また、学校教育における博物館利用を促進するため、「教員のための博物館の日」として、教員を対象に講演会や展示解説を実施した。

山陰海岸学習館に関わる動きとしては、平成 28 年 4 月 1 日から、県全体の山陰海岸ジオパークを推進する体制を整備するため、山陰海岸学習館を知事部局（生活環境部）に移管し、山陰海岸世界ジオパーク推進室と統合再編して、「山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館」とした。

## (1) 組織

山陰海岸学習館を知事部局（生活環境部）に移管した。

## (2) 資料の収集・調査研究

自然部門では大山を中心とした甲虫類コレクションなどの寄贈や、学芸員による採集などにより、様々な貴重な標本を収集した。また、仮保管されていた遺体などを標本化した。これらの標本の整理や鳥取県の生物相に関する調査研究を実施し、その成果をデータベースや研究報告などで発表した。

人文部門では、平成24年から始めた「鳥取藩政資料」解説・研究事業の成果として、『鳥取藩研究の最前線』を出版し、20年前の「旧県史」以降の鳥取藩に関する新知見を発表した。平成16年からボランティア（県史編さん協力員）が解説を進めている「家老日記」のテキストを平成28年3月にデータベースで公開し、平成29年3月には、校訂が完了したテキストを追加公開した。

美術部門では、企画展に関する調査を行うとともに、鳥取県の美術に関する調査を継続して行い、土方稻嶺《興国寺書院襖絵》、伊谷賢蔵《風景（赤いレンガの建物）》、芝田耕《高尾風景》、辻晋堂《岸澤惟安老師像》などを新たに収集した。

## (3) 展示

企画展5回（自然分野1回、人文分野1回、美術分野3回）を開催し、博物館全体の事業に約6万人の来館者があった。

### 〈企画展の概要〉

自然分野：ペンシルロケットから始まる日本の宇宙に関する科学技術の変遷を、小惑星探査機“はやぶさ”の実物大模型や、シミュレーターによる疑似体験など様々な展示で紹介した。はじめて報道機関との実行委員会で開催したことで、数多くのTVスポットなど強力な広報活動を行うことができた。

人文分野：当館の初の試みとして、博物館のある鳥取市から遠隔の地で、企画展（移動展）「大◎荒神展」を開催した。会場は、やがて開山1300年を迎える大山寺の圓流院であり、展示は鳥取県西部において重要な民俗文化財である「伯耆の荒神祭」に関する内容であった。県内に伝わる荒神講の調査成果と、荒神に奉納される民俗芸能である「荒神神楽」の衣装等、あわせて実物資料約30件と写真や動画の映像資料を展示紹介した。関連事業では、2本の講演会の他、三宝荒神社跡に神楽殿を仮設し、国重要無形民俗文化財「比婆荒神神楽」、鳥取県指定無形民俗文化財「下蚊屋の荒神神楽」、県西部で活発に活動している「鳥取荒神神楽研究会神楽団」の上演を見学する講座を開催して、200人を超す観客に観ていただいた。

美術分野：美術部門では三つの企画展を開催した。「昭和の洋画を切り拓いた若き情熱」では前田寛治らが設立した1930年協会の活動を紹介した。「日本におけるキュビズム」では1920年代と50年代の二度にわたる受容という斬新な視点よりキュビズムの影響を検証した。「ミュージアムとの創造的対話」は博物館とサテライト会場で現代美術を紹介する初めての試みとなった。

## (4) 教育普及

普及関係では、県民の生涯学習を支援するため、巡回展・移動博物館・出張教室などのアウトリーチ事業のほか、館内外で講演会・観察会・各種講座・ワークショップなどを開催した。

巡回展・移動美術館・出張教室は、64回実施し延べ6,696人が参加した。また、各種講座や講演会は、

年間を通して106回開催し、延べ3,557人の参加があった。

美術の普及講座では、「毎週土曜日はアートの日！」を実施し、毎週土曜日に美術に関する事業を実施し、アートにふれあう機会を充実させた。また、移動美術館については北栄町と鳥取市青谷町で開催し、当館から離れた地域における美術文化鑑賞の機会を充実させた。

また、自然・人文・美術の各担当の講座を有機的に結びつけたコラボ企画も定着しつつある。

広報に関しては、対象年代や広報手段について検討し、より効果的な広報を実施するとともに、教職員に対する広報の一環として、県内の小中高等学校及び特別支援学校の全教職員に対し、ニュースレター「鳥取県博物館ニュース」を年2回配布した。

## (5) 来館者サービス

平成21年度から実施している開館時間の延長について、午後7時まで開館する日は、教育委員会があらかじめ指定する日(平成27年度まで:4月1日から10月31日までの特別展示中の日曜日、土曜日及び休日)とした。

受付付近にトイレ・常設展示室入口への案内表示を増やし、来館者にとって分かりやすい表示を行っている。

## 2 各課の概況

### (1) 総務課

- ・博物館の運営に関して館長の諮問に応ずるとともに、館長に対して意見を述べる機関である鳥取県立博物館協議会を4回開催。
- ・平成27年度に設置した鳥取県美術館整備基本構想検討委員会を平成28年度は8回開催。
- ・鳥取県美術館整備基本構想のとりまとめに当たり、出前説明会を45回、県民フォーラムを3回、美術館キャラバンを23回開催したほか、県民意識調査を2回実施。
- ・県立博物館外壁等改修工事を実施(営繕課受託施工)。

### (2) 学芸課

#### ●自然担当

- ・企画展「宇宙への挑戦～未知への扉をひらくとき～」
- ・田中昭彦植物標本整理事業(5か年)5年目
- ・三島寿雄昆虫標本整理事業(3か年)3年目
- ・谷口正夫・遠藤勝壽地学標本整理事業(5か年)3年目

#### ●人文担当

- ・企画展「大◎荒神展」
- ・鳥取県の歴史民俗事象調査事業(寺院の棟札)
- ・藩政資料整備事業(16か年)12年目
- ・収蔵資料保存・修復事業(刀剣研磨、武士像)
- ・「鳥取藩政資料」解説・研究事業(6か年)5年目
- ・論文集『鳥取藩池田家の総合的研究』を編集・発行

#### ●普及担当

- ・学校教育支援事業の開催
- ・学校・市町村・教育機関と連携した普及事業の推進

- ・移動博物館、移動美術館、学芸員派遣等の募集及び調整
- ・各種広報活動の立案及び実施
- ・公式ホームページの管理運用
- ・収蔵資料データベースサーバーの管理運用
- ・普及誌「鳥取県立博物館ニュース」No.20、21 の発行
- ・リーフレット「2016.4-2017.3 展覧会・イベントのご案内」の発行

### (3) 美術振興課

- ・今年も美術部門では三つの特別展を企画した。「昭和の洋画を切り拓いた若き情熱」は前田寛治らが結成した1930年協会の足跡をたどった。一年以上をかけて日本各地を巡回する展覧会となったが、本館の館蔵品を中心に構成され、コレクションの厚みを知る機会となった。「日本におけるキュビズム」は数年にわたる準備を重ねた展覧会であり、新聞各紙にも取り上げられるなど大きな話題を呼び、美術館連絡協議会の優秀カタログ賞も受賞した。「ミュージアムとの創造的対話」は現代美術の作品を本館と県内のサテライト会場に展示する初の試みで、県内外から多くの来場者があった。
- ・2階近代美術展示室では、「前田寛治素描」「御道具譚～作品に残された旧蔵者の影」「まる○さんかく△しかく□」「生誕100年 濱田台児展」、夏休みの子ども向け企画として「いとをかしーかたちのふしぎと出会う場処」の5本のテーマ展示を開催した。
- ・1階美術常設展示室では、おもに分野別にテーマを設定して資料を紹介したが、なかでも当該年に生誕100年を迎えた染色家・岡村吉右衛門について、約半年間かけてその作品や資料を紹介する特集展示を開催した。
- ・年間を通じて毎週土曜日に美術普及活動を展開する「毎週土曜はアートの日！」を本年度も実施し、ワークショップ、アートセミナー、アートシアター、ギャラリートーク、企画展関連事業等を通して美術に関する教育普及に努めた。